

“こ な” と “つ ぶ”

香川県農業試験場

安 藤 奨

ある日、禅僧の書を拝見する機会を得た。大きな〇の上に「これ食うて、お茶まいれ」と墨痕あざやかに書いてあった。大きなまんじゅうを食った後のお茶とは、よいタイミングではある、と下らぬことに感心していた。

お坊さんが、これは仏教の奥義で、〇は空とか無をあらわしているのだ、と説明しはじめた。

よくわからない話を円満な顔をしてお茶をにこし、〇に目を注いでいた。所詮は土壌・肥料屋、いつしかその〇が穴にみえたり、つぶにみえたりしはじめた。

穴といえば、土壌空間である孔隙が目に見え、土の中には大小さまざまな孔隙がある。それを通して水が動く。植木鉢に土をつめる。それに水をやると、水は鉢の下から流れ出す。このような状態になると、水は土の中に十分浸み渡っている。

土をよく見ると、粉と粒が混じっている。粉と粒が作る大小さまざまな孔隙が、水の土への浸透と、排水をほどよく調節していることに気がつく。

粉と粒が混沌と混じりあっている世界が、自然の世界である。この自然の世界に人間の思考や力に加わると、粉と粒の区分がはじまる。

稲の稚苗移植用床土を、一例として話を進めることにする。

育苗用の床土は、水が迅速に土の中に浸み渡ることも大切であるが、もう一方では、根の酸素不足を生じないように十分な空間が必要である。粉状の床土を用いると、発芽はよく揃うが、酸素の供給が不十分なため、根の生育が不良になる。

このようなことから、育苗用の床土は、粒状にして販売されている場合が多い。販売するとなると、粒がよく揃っていて、見掛けの美しいものがよろこばれる。ここで床土は、混沌の世界から整然の世界に移り変わる。

この粒状の床土に灌水すると、排水は極めてよ

い。粒の表面は十分水で潤っている。粉状の床土の経験を生かして、水は十分だと思っていると、発芽が不揃いになる。よく調べてみると、粒の中まで水が浸み込んでいない。

粒状にすると、排水速度と土の中への浸透速のつりあいがぐずれ、粉と粒が混りあっていたときのような灌水法ではうまくゆかない。これは、粒と粉がつくりだす孔隙と、粒の中の孔隙とでは、まったく別の世界であるためであろう。

粉と粒と混りあった自然の世界は、材質的には不均一であるにもかかわらず、水の動きは、全体一様に動いているようにみえる。

ところが、人の力が加えられて、造粒され、整然となった世界は、材質的には均一化されているにもかかわらず、水の動きには、異なった2つの世界が確然とあらわれる。

粒と粉の間の水の動きがあまりに速いので、粒状床土をしばらく水の中につけておくと、水は粒の中まで浸み込み、ちょっと手がさわると、粒がくずれる。このようになるまで水を浸み込ませておくと、発芽揃いがよい。

発芽後の生育は、根に必要な酸素が十分供給されるので、地上部も地下部も旺盛である。

水の動きが異なると、肥料のきき方も異なる。粒状床土の場合、肥料を土と混ぜて造粒する。粒と粒の間を通る水は、粒の中へ浸透しながら排水される。この間、粒の表面にある肥料が溶脱流亡するのみで、粒の中の肥料は安全である。このようなことから、粉状床土より粒状床土の肥料が長きぎする。

以上、粉と粒という問題の一面をかいまみた。状態の違いが、余りにも多くの要因に影響することに、いまさらのごとく驚いた。お茶でも一服いただき、心を落ち着け、木目細かく自然をながめたいものである。